

「自分の言葉で語る人になりなさい」

畑 中 千 晶

(新 40 回、敬愛大学国際学部こども学科准教授)

タイトルは、高校時代に最も影響を受けた窪谷徹先生（国語科）から頂いた言葉です。当時の私は、親から繰り返し「手に職をつけなさい」と言われていたこともあり、何か技能を身に付けたいと考えていました。そのとき、偶然心引かれたのが、国会で活躍する速記者の姿でした。確か高2の頃のことです。気の早い私は、速記のテキストを取り寄せて練習まで始めていました。そして、あるとき窪谷先生に、速記者になることを考えていると打ち明けたところ、上記の言葉をかけて頂いたという次第です。先生がおっしゃったのは、自分の頭で考え、それを発信する人になれ、ということであったかと思われれます。この言葉を頂いたことが、私の転機となりました。

現在、私は大学教員として、小学校教諭を目指す学生たちの指導にあたっています。小学校教員免許の取得に不可欠な「国語」という科目を始め、日本の古典文化を探究する「日本文化論」、文学作品を読み解くヒントを学ぶ「文学入門」などの科目を教えています。また、本務校（＝専任教員として勤めている大学）に加えて、非常勤講師として、青山学院大学では「日本文学とアメリカ・ヨーロッパ」を、駒澤大学では「フランス語」と「比較文学」とを教えています。いずれの科目も私にとって大切なものであり、学生たちと関わるのが私の生きがいになっています。

大学教員という仕事のうち大きな部分を占めているのは研究と教育です。この仕事を続けるうえで大切なことは、まさに「自分の言葉で語る」ということ。窪谷先生は、研究者になれという意味でおっしゃったのではないかもしれませんが、結果として私は、先生の言葉を、非常に深い意味において実現することになりました。

実は、私にはもう一つ転機があります。そして、それも窪谷先生に由来します。東京学芸大

学の国語科に進学する際、入学したら必ず小池正胤教授を訪ねるようにと助言を頂きました。元来が素直な人間ですので、入学してすぐに小池先生の研究室を訪ね、「ゼミにいらっしやい」と声をかけて頂いたのを機に、先生の主宰する「近世文学ゼミナール」に入ります。ここで数々の江戸時代の文芸に触れ、その魅力に目覚めることになるのです。

ところで、私の担当する科目群を見て、不思議に思われた点はありませんか。「国語」と同時に「フランス語」や「比較文学」などの科目も並んでいます。これは、私が大学3年次にフランスへ国費留学したことと関わっています。帰国後、小池先生の研究室で卒業論文を書く際、留学経験を生かした形で近世文学研究を行ってはどうかとの示唆を頂いて、それが、現在行っている研究手法「翻訳を通じて日本古典文学を読み解く」というものに繋がっていくのです。その後、国際基督教大学（ICU）の大学院で博士の学位を得、その成果を『鏡にうつった西鶴一翻訳から新たな読みへ』（2009年、おうふう）という本にまとめることができました。今までにない、新しい研究手法を進めるに当たって、小池先生の力強い励ましが、常に私の心の支えとなりました。二人の恩師の存在は、まさに私の人生の羅針盤と言えます。

高校生の皆さんは、実に大きな可能性に満ちた存在です。つまり、高校時代には想像すらしていなかった道が、今後拓けていく可能性も十分にあるということです。それは偶然のように見える出来事の積み重ねの中で起こってきます。ぜひ、周囲の人々との関わりを大切にしながら、皆さんの持つ可能性に形を与えていってください。応援しています。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)